

「海水館の想像復元図の事例を通して」

—— 空間デザインの視覚情報伝達技術に関する研究・開発の事例 ——

**A CASE STUDY OF THE RESTORATION
MAP FOR THE FORMER “KAISUI-KAN”**

—— **A CASE STUDY ON THE RESEARCH AND DEVELOPMENT
OF TRANSMISSION/TRANSFERENCE OF DESIGN
SPACE'S VISUAL INFORMATION** ——

小 澤 尚
Hisashi OZAWA

This paper reports on the research and development of the space design, urban design and the related technologies for visual information through a concrete case study of a project design.

This case study is about the making of a restoration plan to a valuable historical and cultural facility for which its appearance is unknown.

The reason to focus on the facility named “Kaisui-kan” built in 1905 is because the materials which were not in use from a building in Sendai city, Tohoku region were reused to build a resort-like long-term stay facility in Tokyo. This build functioned as a lodging facility, where famous writers like Simazaki Toson stayed during their creative activity.

Based on the available materials, we figure out and analyze the building and environment for that time. Through the process of making the restoration map, we have verified the value of the space design of that facility. Also, we have thought about the restoration and revival of that facility, which would constitute a project design with cultural value,

Key Words : urban design, history, reuse, restoration, creative activity, lodging facilities,

キーワード : 都市デザイン, 歴史, 再利用, 復元, 創作活動, 宿泊施設, 島崎藤村

able to activate the zone where it is restored.

事業構想としての空間デザイン、都市デザイン及び、その視覚情報伝達技術に関する研究・開発の蓄積事例の一つとして報告する。この例は、現在は既に失われ、姿不明の過去の文化的で歴史的な施設について分析し、その復元構想図を作成し、姿を明らかにしようとした例の一つである。1905年(明治38年)に開業された「海水館」とよばれたこの施設で注目される点は、東北地方の都市、仙台にあって使われなくなった建物の材料を、首都東京・隅田川河口の佃で再利用し、違った用途として建てられ、島崎藤村をはじめ当時の著名作家等が創作活動行つた長期滞在型のリゾートの施設ともいえるべき宿泊施設として機能したことにある。既存資料に基づき、当時のその建物及び環境の分析とともに、想像図作成を行つた過程で、その施設のもつ空間的価値を確認できたとともに、復元図等を通して、現代への復元、再生等、地域活性化につながる文化的な事業構想への展開の課題も考察された。

背景と目的

本研究は、社会的意義を持つ事業構想を導くための、構想・計画段階の発想や着想につながる空間系のデザインにおける視覚情報の伝達技術に関するあり方を、ケース・スタディの実例等を通して明らかにする蓄積の一つとしてある。

今回の目的は、地域活性化につながる重要な地域の埋もれた歴史的な資産や、地域の失われた歴史的な資産のいくつかのケースについて、不明な空間系の再現像を、文献等をもとに推理して明らかにしていく視覚情報を試作するとともに、再建等の事業化への役割と可能性について検討することを目的とした。

上記の研究サンプルの一つは、かつてあった文化的施設が、現在は姿をなくし、また写真や絵図等、施設の状況の資料がなく、姿が不確かなケースの一つである。

そのサンプルは、明治時代、島崎藤村が「春」を書いた下宿旅館とされている施設である。この施設は、仙台市の遊興施設として作られた建物を東京・中央区佃島に明治時代から大正時代にかけて旅館として移築、再生された「海水館」と呼ばれた施設である。

このサンプルの移築、再生される前の原型は、島崎藤村の表現の記録によると当時「女郎屋」と呼ばれた種類の施設として建てられたものであるが、注目したいのは、これが倒産して処分に困った後、その建物の材料を、仙台から東京まで船で運び、活用して、海を望む下宿旅館として再生されていることであり、資源の有効利用というだけでなく、用途や活動が異なる施設として機能していたことにも注目することができる。また、島崎藤村をはじめとして小山内薫や竹久夢二など文芸、絵画、演劇の分野で活躍した作家たちが、創作を行つた施設であること

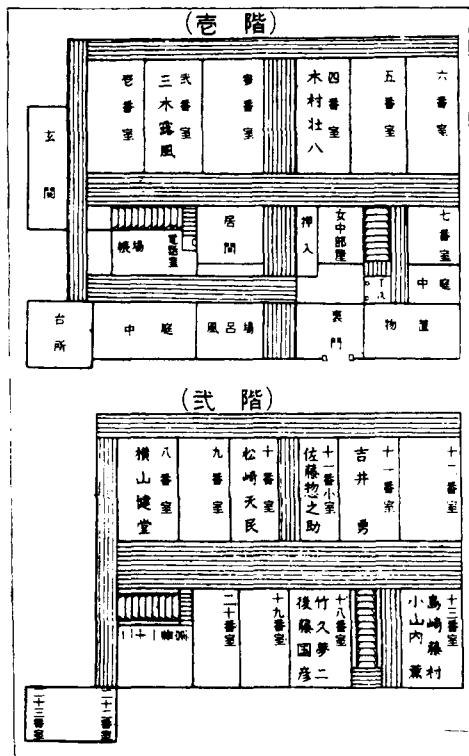
から、その環境や施設についての分析や復元、あるいは再現等の事業化について分析する社会的意義は高いと考えられる。

その姿を明らかにする過程で、各階平面図を推測しながら、透視図的な構想図で起こすことを最初の目的とした。更に、その分析、推測した姿とともに、文化的活動が行われた因果関係について施設として評価するとともに、それを再現する社会的意味や事業等についての評価を明らかにしながら、視覚情報伝達技術としてのあり方も探る目的があった。

方法

「海水館」の当時の姿の想像図作成については、文献資料、地図等を参照しながら既に記憶によってつくられた簡単な略図（図-1）¹⁾と、文章等の記述^{2,3)}によって、建物の1階平面図（図-2）、2階平面図、屋根伏図を推測、作図した。そして、土地や配置については文章記述、地図^{4,5)}、面積等との整合をとりながら推定した。建物の全体像及び細部については上記図面と、当時の同種の建物を仙台・東京の例の絵図や写真^{6,7)}を参照しながら推測した。外構も同様に推測している。

図1 海水館 略図 二代目坪井伊三郎の記憶によるもの 出典¹⁾



分析及び復元想像図作成概要

既存資料と復元図作成根拠

「海水館」の歴史的・文化的価値のある時期、即ち関東大震災以前の明治末期から大正時代の姿についての明らかになる写真、絵図の資料は、遠景からみた「海水館」らしきシルエットがわずかにわかる限りである。⁷⁾ 文献資料としては、「海水館」二代目主人、坪井伊三郎 — 明治 20 年生 — からの、昭和 30 年代のヒアリングによる記録がある。したがって、図面類はないが部屋数や何番の部屋を、どんな作家が使っていたかがわかる略図 (図 1)⁸⁾ が、そのヒアリングの

図 2 海水館想像平面図 1 階, 2 階

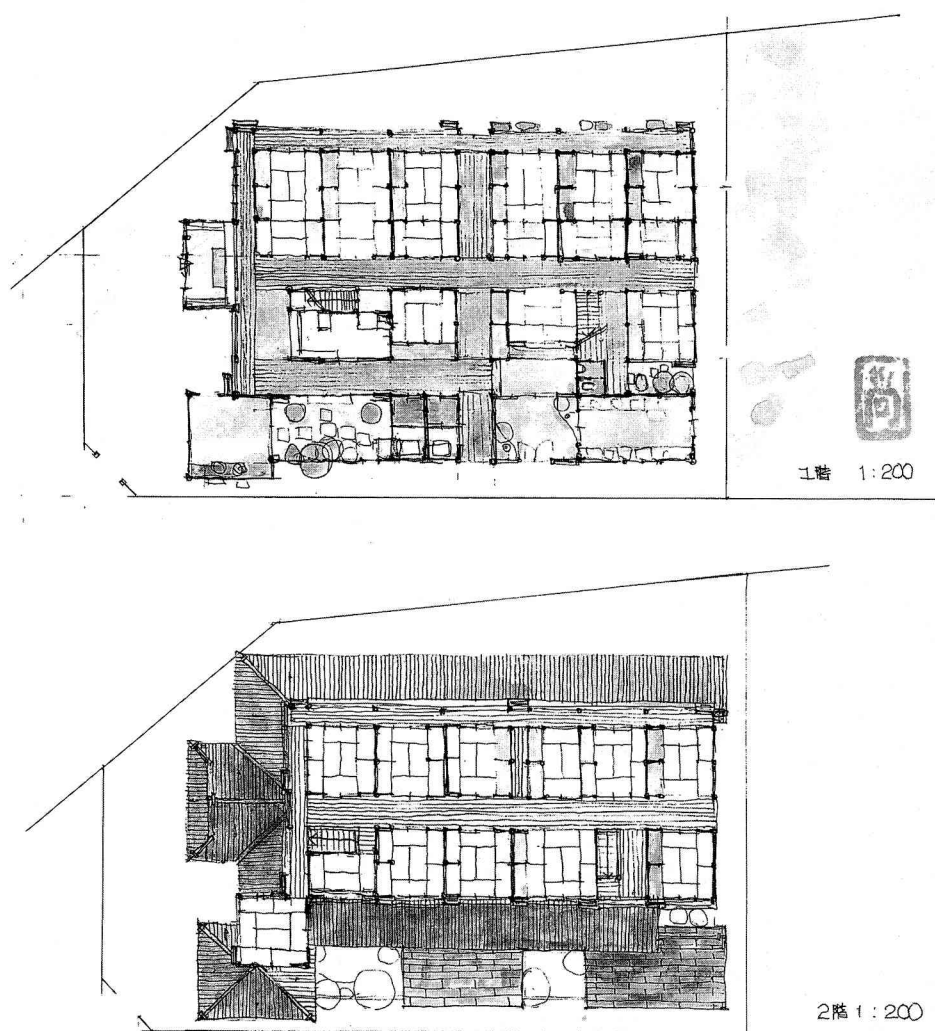
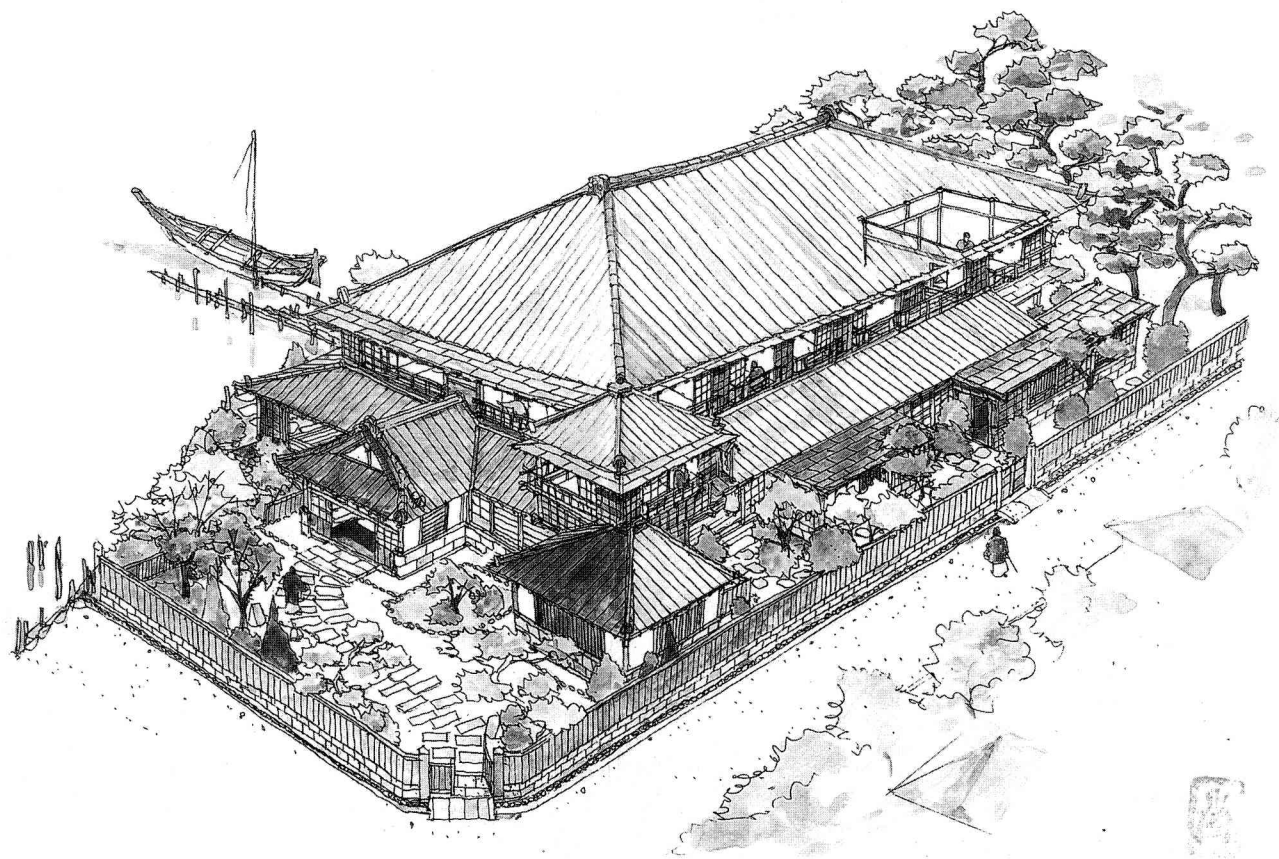


図3 海水館全体想像図
図2より作成



際につくられており、その略図とヒアリングの文章記録²⁾と、島崎藤村のこの宿に関する記述³⁾などを照合しながら、建物の図面を起こしている(図2, 3)。

宿泊著名作家等と部屋

その昭和30年代のヒアリングによる建物の略図(図1)¹⁾は、1階、2階に分かれて、1番から23番まで各室番号とその位置、そして廊下、階段、帳場、電話室、居間、女中部屋、台所、風呂、手洗い、中庭、物置、裏門が記載されている。14番室から17番室については欠番で記載され、1階と2階で合計20室あったとされている。1階2番室には、三木露風(詩人)、1階4番室には、木村荘八(画家)、2階8番室には横山健堂(作家)、2階10番室には、松崎天民(新聞記者、作家)、2階11番小室には、佐藤惣之助(詩人)、2階11番室には吉井勇(歌人)、2階18番室には竹久夢路(画家)、五島邦彦(新聞記者)、2階13番室—島崎藤村(作家)、小山内薫(劇作家)の記載が残されている。この他、室番号には記載されていない利用者の著名人には、市川左団次、久保田万太郎などが利用したとされている。

規模と建物の概要

その時のヒアリングの記述による建物概要と規模は、和風2階建て、敷地約200坪前後、建坪120坪から130坪、この時代に全館電気による照明で、建物の材料は前述のように仙台から運んだもので、初代主人半蔵の好みの仙台石を土台部分及び敷石、門柱等に用いている。

建設経緯

建物の建設経緯は、仙台から分解状態で東京・隅田川を経由して船で運ばれ、重い仙台石も同様に苦労して運ばれている。また、この海水館の建設にあたった大工も仙台から呼び、その作りは頑丈を極めた作りであったとされている。

建物仕様程度

また一方で、構えや仕様については当時の旅館としては豪奢あるいは豪華という表現がされている。豪奢な門から玄関までの道に仙台石の敷石をもちいたり、玄関の桁に磨き丸太を使ったり、あるいは門から玄関までの間の植栽については、敷地と建物の規模の関係からしてそう広くはないが、杉林という表現がされ、奥行きを感じさせる密度の高い植栽を施していたと推測される。

室内導線と廊下

玄関は、建物北東側にあり2間4枚戸、一階の廊下は、海側—南東側、玄関側—北東側、台

所と裏門へ続く北西側、中廊下は玄関から南西方面につながる幅1間、奥行き13間半のものと、建物ほぼ中央に南東から北西に抜ける中廊下で構成されている。2階の片廊下は、海側と、玄関側にあり、中廊下は1階と同じ位置に作られている。この玄関、裏門、廊下の導線の構成は、各部屋を回り込みながら2方向から入室できるような構成であり、例えば、客を案内する時に、部屋を出る他の客と顔合を、させないことができるような構成で、仙台で当初作られた目的の機能をはたすような構成になっていることがわかる。

台所とサービス

一階の北西側は、玄関の方北東から南西方向に台所、中庭、風呂場、裏門、物置とつづいて構成されており、異例と思われる点は、表門から入って玄関より先に台所が見えるような平面構成がされているところであろう。一代目主人がうなぎ屋という点からすると、台所が重要視され、主人の仕事場から来客がわかるといった利点からこの位置に設定されていたのではないかと推測される。台所も仙台石を土台回りに施してあり、台所付近の外構である門まわりの様子は、初めて来た客が、ものおじするといったことがあったように施設の構えが格式高く見えたようなつくりがされていた。

主人の料理人としての腕ばかりでなく、食材は、直前の水辺の環境からとれたばかりのうなぎ、はぜ、こい、しじみなどをもサービスでき、口のこえた作家達をも満足させるに足りる食事を用意できたと想像される。利用者の好みに応じたサービスがされ、島崎藤村のような質素な料理好み、さりげないサービスを好んだ利用者也、小山内薫や吉井勇のように食べ物の注文が多く、にぎやかさを好んだ利用者にも対応したとされている。

宿代は、部屋代、下宿代といった言われ方をしており、たまった宿代を、作家の本家や実家に請求に行く、若い作家には特別に安い下宿代にするといったはからいもされ、食事は別会計等、利用者の要求、事情に応じての対応がされていたと推測される。

サービスは、主人、おかみ、息子家族3人、女中7人、飯炊き1人の11人で20部屋のサービスをしており、部屋数に比べきめの細かいサービスがされていたことがわかる。

更に、台所、中庭、風呂場といったサービス部分にあたる構成は、仙台で当初作られた機能ではなくてもよい部屋とも考えられ、また位置的にも新たに付け加えられた可能性が高い。おそらく東京で「海水館」として機能するための付属屋としての作りであったのではないかと推理される。

風呂とサービス

風呂場は、建物北西側の中程の位置にあり、周りを仙台石で囲み、男湯と女湯に別れ、終日湯を沸かすサービスをしていた。こうしたサービスは、一代目主人が、この「海水館」を建て

るきっかけの前、当初は熱海で営もうとしたことが背景としてある。そして、東京の海が見渡せる立地から、この施設を建てたといういきさつもあって、質の高いサービスを行っていた。

手洗い

手洗いは、建物北西側、風呂場・裏門よりも更に奥の位置にあり、物置より内側に位置しており、その内部仕様は、材料を吟味し、檜の一枚板を90 cm (3 尺) 四方にめぐらし、島崎藤村が主人に「いい板を使っているね。なかなか東京じゃ見られない。」と言わしめた程であった。

宿と部屋のイメージ・仕様・眺め

島崎藤村の短編「苦しき人々」³⁾に、この「海水館」に関する次のような記述がある。「『... 好い部屋だ。なかなか木口もシッカリしてらあ。海の見えるところで一寸これだけの位置は得られないよ。』「しかし、妙な建方だろう。...」...「... 是は普通の建物じゃない... なんでも東北の地方にあった女郎屋を取崩して、それを舟に....」。『道理で、廊下が長いと思った』....「... この部屋は... を取った部屋だ。押入もないや。... ここで君が地図を引いているなぞは、面白い。一緒に吾われが飯を食うなぞは、いよいよ面白い。』...」といった記述が残されており、転用された部屋から様々なイメージーションを呼び起こされていたことがわかる。

また「私が泊まっていた旅館はかなり宏壮な建物で、下宿する客も大勢あった。海の見える座敷は皆なフサがって居たから、... 北向の寒い部屋を撰んで、....。.. 飯も手盛で...。部屋の壁はまだ上塗りがしてなくて、粗い、鼠色の土の儘だった。..... 窓の下に青々とした草地が見える。草地の向ふには相生橋から月島へ通う廣い平坦な道路の一部分も見える....。.. 草地へ遊びに来る鶏や、子供や、それから向ふの往来を通る職工の群などを眺め入りながら、....。.. 考えたり... 手紙を...」といった記述があり、立派な仕様で海を眺める空間だけでなく、質素なサービスや部屋で、違ったイメージーションもわく室内空間や眺めがあり、小さな施設に多様な空間があったと推測される。

周辺環境とリゾート性

この海水館が建った当時は、晴海埠頭や豊洲埠頭などができる前で、東京湾の海の眺めを阻むものはなく、遠くは房総半島まで眺められた。そう建物や工場なども多くなかった頃であり、通りを挟んで建てられた海岸病院もまだなく、「野原のような」という表現もされており、周辺には銀行頭取などの別荘や邸宅があった。敷地南西には松林があり、藤村もそこをよく散策していたと語られている。また、周辺は、昼間でも人があまり通らない閑静な場で、春はウグイスが鳴き、夏はホタルが飛び、草むらではキリギリスが鳴いたとも語られている。水辺からは、帆掛け船が見えて、「海水館」施設内でも釣り糸をたれることができた。

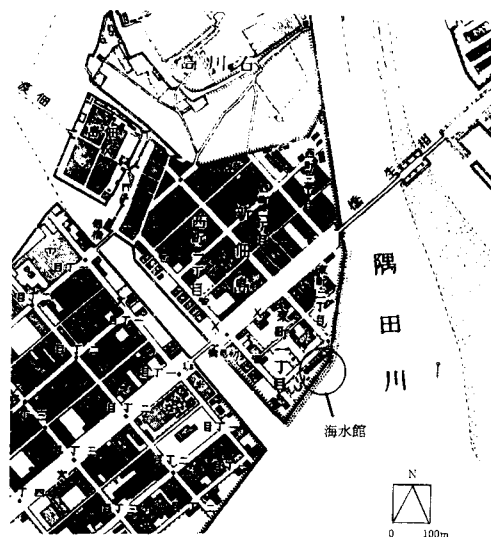
いわば小さな施設ではあるが、周辺環境も余暇の過ごす多様な展開が可能であり、単に休養のみならず、創作をかき立てたり、創作の気分を展開したりするに十分な環境があった。

一方、こうした静かな環境にもかかわらず、この「海水館」の位置は、東京都心に近く銀座からは、水平距離 2.1 km にあり、当時でも市電や渡しの交通機関に恵まれ、多様な都市生活や活動の利便性にも恵まれていた。小山内薫と一緒に「自由劇場」を開設した市川左団次が芝居の後、にぎやかな宴を供にしていたように、社交の場としても機能し、電話も整い、創作等に耐えうる長期滞在型で、旅館というよりは、わがままな利用者の時間や食事に耐えうるホテル的性格をもっていた。更に、施設づくりにしても建物の再利用による復元なども含めてテーマ性があり、現代の施設設営を検討する際でも学ぶところがある。いわば、クリエイションにつながる長期滞在に対応できる、環境共生型のリゾート公益施設の性格をもっていたことになる。

平面図及び想像図作成に関する考察過程

記憶による当時の略図は、縮尺や寸法がなく、図や各部屋のプロポーシオンは不明であり、そのまま 1, 2 階を重ねてみると南西側にある中庭が、2 階の床で存在できないなど構造上の矛盾もおきてくることが判明した。したがって、想像図の作成にあたっては、平面図を想定する必要があった。建物の短辺方向については、長辺方向の廊下の長さが記述にあることから、面積とを照合して 1 階の奥行きを割り出している。部屋の割り振りについては、中廊下の幅、部屋の位置、機能の設定、2 階屋の乗り方とあわせて割り振った。

図4 海水館周辺地図 出典⁴⁾に海水館位置を表示加工



1階の海側の部屋については、建物全体の短辺方向の奥行きが多さや、略図の部屋のプロポーシオンから、4畳程度の前の間があったのではないかと推定している。海側、及び玄関側の廊下は、2階部分の部屋、廊下等の幅から、2階部分が廊下より下がって建ちあがる、和風の一般的に見られる下屋のような構造であると推定された。また、風呂場、物置などは、2階略図との整合や中庭、裏庭を含む範囲であることから、平屋であることが推定された。2階、北側に飛び出した22、23番室については、下の台所の位置とも整合せず、構造的にも無理と思われるかなりのはね出しがあることになるが、略図程ではなくとも90cm程度のはね出しはあり得ると推定している。

敷地と建物の関係は、面積の数字では建物が収まる敷地の規模であるが、当時明治時代の地積図や地図^{4,5)}でわかる不整形の地形には、建物が収まりきれない敷地形状であり、大掴みの位置関係を想定している。

根拠となる資料のない建物の開口部や外部仕上げは、仙台及び東京にあった当時の同種の建物の記録や写真⁶⁾によって推理し、想像図を作成している。建物の構えは豪華という表現がされており、母屋の屋根は瓦葺き、下屋の部分は銅板葺き、2階開口部は手すりや雨戸とガラス障子と想定した。外構は、庭などの樹種が不明であり、構えにあった四季おりおりのおちついた奥行きのある外構として想像図を作成している。

結びーデザイン情報伝達としての今後の課題と復元の事業化への展開の考察

初期の目的に対する成果と今後の課題

今回の想像図は、まず、不明な点を明らかにするとともにこうした作図によって、より確かな資料が出てくるとともに、より確かな姿を引き出す情報になればという段階的な資料として位置づけた範囲のものである。今回の分析過程で、作成の元資料となった記憶による略図の構造的、機能的な不整合や、規模と敷地形状との不整合が明らかになったとともに、建物の外部材料や仕上げ等の詳細の不明部分について整理することができた。また、図を作成して間もなく、この図の視点からでは隠れている当時の水際、護岸の技術や姿についての検討の議論も始まっており、次の段階へのステップになった。

施設の空間の質と、もたらした活動の関係

こうした細部についての整合性は、今後の課題であるが、現段階の分析作図によって、この小さな施設の持つ空間的な全体像の意味は明確になってきた。その一つは、この施設は、小規模であったが、周辺環境、施設内環境ともに、時間や季節や人間の営みなどを感じさせる広がりがあったことである。もう一つは、利用者の我儉な要求にも耐えうるサービスとそれに対応する施設機能が付設されていたことである。そうした施設背景が、作家たちによく利用された

という結果を招き、またイマジネーションをかきたてる空間が、作家活動にプラスな効果をもたらしていたことも推測される。

全体像を明らかにしたことで、いわば、創作意欲につながるような、長居できるサービスと空間があったことがわかってきたといえる。

現周辺環境整備等に対しての空間デザインとしての情報の意味

当研究から次の段階に位置づけられる内容であろうが、想像図を作成したのち、現地や地域住民、行政等に接して、次のような発想もその途上で浮かんできた。そのことも少し付け加えれば、この「海水館」が建っていた周辺地域は、現在、超高層ビルや超高層住宅が建設され、また建設中の都心のウォーターフロントと呼ばれる地域である。河川沿いは、緩傾斜堤防として継続整備されているところであるが、水辺のアメニティーや景観に関しては途上にある。また、付近の河川沿い大規模開発整備について進行中のところがあり、水辺のあり方については定かになっていない余地もある。そんな動向の中で、ここでとりあげた「海水館」のような、水辺との関係をもつ日本的な形態の公益施設が、高層棟の足元でアメニティーに寄与する施設として再現されるような考えが浮かんでいても不思議はないだろう。用途としては、宿泊ではなく水辺を楽しめる料飲施設等も考えられる。アメニティーを増すのみならず、歴史的文化的顕彰、景観的向上等の意義も考えられることである。立地上、都心内の観光やリクリレーションの拠点の役割を持った場所であり、採算の取れやすい立地にある。また、実現や運営に関しても、地域コミュニティが関連すれば、地域活性化等の効果も期待できる可能性もあろう。

この検証については、次の課題であるが、「海水館」の姿を分析し、想像図を作成し、情報として伝達する意味や技術を考えることによって、このようなことが、地域活性化の一つの発想につながりうることを期待したい。

参考文献

- 1) 豊島 寛彰「隅田川とその両岸」芳洲書院 1961
- 2) 明治学院大学 藤村研究部「桜の実第5号」佃「海水館」藤村記念碑特集号 1969
- 3) 島崎藤村「苦しき人々」文章世界 1909, 1月号
- 4) 「明治42年測量図—万分之一図」
- 5) 「東京市京橋区月島に於ける実地調査報告 第一号」中央区沿革図集
- 6) 田村昭編著「仙台花街繁昌記」仙台宝文堂 1974
- 7) 田山録弥著 柴田常吉撮影「東京写真帳」博文館 1907